この敬虔なアクシズ教徒に祝福を！

nekoge

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このすばを見てかきたくなりました。

以前投稿した物語の再構築です。

目次

このオリ主に異世界転生を！ ―― 1
この敬虔なアクシズ教徒に異世界生活を！ ―― 9
この敬虔なアクシズ教徒に始めての冒険を！ ―― 15
この敬虔なアクシズ教徒に洗礼とお仕事を！ ―― 32
敬虔なアクシズ教徒、紅魔の里へ！ ―― 44
敬虔なアクシズ教徒と紅い瞳のウィザーズ ―― 57

このオリ主に異世界転生を！

「影宮水穂（カゲミヤミズホ）さん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先程不幸にも亡くなりました。まだ短い人生でしたが、あなたの生は終わってしまったのです」

目を開けると周りは真っ暗で、俺は椅子に座っていた。

「・・・・」

突然のことに俺は口から言葉を発することができない。

「ここはどこだ・・・ あんたは誰なんだ？」

口から出た言葉はあまりにもお粗末。

しかし目の前の美しい女神のような存在は優しい笑顔で答えてくれた。

「貴方は一人の少女を助けるために道路に飛び出して代わりにトラックにひかれ亡くなったのです」

その言葉を聞いて思い出した。仕事帰りに赤信号の道路に飛び出した少女にトラックが迫っていたのを見て俺は道路に飛び出して・・・飛び出して・・・ 死んだ。

「あの・・・ 少女は無事なんでしょうか？」

「安心してください。少女は貴方のおかげで傷ひとつありません」

それを聞いて少し安心し、気持ちも少し落ち着いた。

「ここは？貴方はいったい誰ですか？」

するとその女神のように美しい女性は微笑だ。

「私の名はアクア。日本において、若くして死んだ人間を導く女神です」

髪と瞳は透き通るように美しい青色。スタイルもバランスよく整っており、ここの神聖な雰囲気も影響しているのか、彼女はとても神々しくみえる。

「さて、影宮水穂さん。若くして死んだあなたには、二つの選択肢があります」

選択肢？

「一つは人間として生まれ変わり、新たな人生を歩むか、そしてもう一

つは、天国的な所でお爺ちゃんみたいな暮らしをするか」
　天国か生まれ変わりか選択肢は二つか。
「迷いますね」
「それも良いけど、もっといい話があるの！」
　もっといい話？
「あなた・・・・ゲームは好きかしら？」
　ゲームは学生時代よくやっていた。しかし働きはじめてからはさっぱり。買いだめしたゲームを結局クリアせずに放置していた事を思い出してしまった。
「実はこの世界とは別にもう一つの世界に行ける話なんだけどね」
　女神様の話では、ここではない世界、すなわち異世界に魔王がいるその魔王と魔王軍のせいでその世界が危機的状況なんだとか。
　その世界では、魔法、モンスターが存在する、まるで某有名ゲームのようなファンタジー世界。
　またその世界で死んだ人達が魔王を恐れてその世界に生まれ変わることを拒否し、そのまま赤ちゃんが生まれずその世界が滅びるかもしれない。その解決策として他の世界で死んだ人々を、その世界に送り込む。
　誰が考えたんだこのシステムは？
「で、どうせ送るなら、若くして死んだ人を肉体と記憶はそのまま、あと向こうに好きな能力や物を持っていく権利をあげているの」
　以前読んだ異世界転生系のラノベみたな展開だな。
　なら選択肢は一つしかないではないか。
「では女神様のいい話でお願いします」
「ふふっそう言ってくれると信じていました」
　女神様はカタログみたいな紙を手渡してきた。
「では選びなさい。たった一つだけ。あなたに何者にも負けない力を授けてあげましょう。それは強力な特殊能力。神器級の武器。さぁ、どんなものでも一つだけ。異世界へ持っていく権利をあげるわ」
　俺はそれらをパラパラとめくる
《怪力》《超魔力》他にも聖剣なんとかを初めゲームだとレア装備や

神器級の武器が沢山ある。
魔法が存在する異世界なら是非魔法を使いたいと思ったので超魔力を選択した。
「すいません、この《超魔力》でお願いします」
すると俺の周りに青い魔法陣のようなものが現れた。
「分かったわ、それじゃ、この魔法陣の中央から出ないようにね」
緊張が走る
「女神様一つ質問をよろしいでしょうか？」
「どうしたのかしら？何か聞きたいことがあるなら早くしてね、まだ仕事が残ってるから」
「女神様はどこかで崇められたりとかしていないんですか？　そんなにも美しくて凛々しいくて魅力的ですので」
嘘ではない。実際女神様の姿は誰もが納得するほどの美少女だ。すると女神様は胸をはって答えてくれた。
「いい質問ね！私は今からあなたが行く世界に存在するアクシズ教っていう宗派の御神体なのよ！」
ほう。まあ女神、つまり神なのだから崇拝されるのほ当たり前か。
「こんなにも美しい女神様を信仰するアクシズ教というのは素晴らしい教えを広め誰からも尊敬されているんでしょうね」
そんな適当な事を言った時、アクア様は興奮した様子で口を開く。
「そうよ！何せ私を・・・崇めてるんですもの!!!あなたのこと気に入ったわ！貴方には私直々にアクシズ教団の信者になる事を許可するわ！だから転生特典としてもう一つ特別な物をあげる！」
「ありがとうございます。アクア様」
社交辞令のつもりだったのだが。
女神様もといアクア様は右手を俺に向け何か呟くとその手が光り輝き、俺はその光に覆われた。
「本当は駄目なんだけど貴方は特別よ！」
女神様の光が離れる。すると先程まで無かったモノが俺にあった。
「これはケープ？」
どこかの有名な探偵か昔の学生が着けてそうなケープを渡された。

デザインは綺麗な青色でそれが綺麗なネック模様になっている。
　更に首には三角形が重なったような形がかかれているひし形のペンダントがあった。
「そのケープは私の魔力で造った特別製よ！それを身に付けるだけで私の神聖な加護をずっと受け続けられるわ！あとその首にかかってるのはアクシズ教徒の証よ！」
「重ね重ねありがとうございます」
「気にしなくなくてもいいのよ！ゴホンッそれでは、影宮水穂さん。あなたをこれから、異世界へと送ります。魔王討伐のための勇者候補の一人として。魔王を倒した暁には、神々からの贈り物としてどんな願いでも。たった一つだけ叶えて差し上げましょう」
　すると魔法陣が光り、身体が宙に浮いたと思うと俺の意識は無くなった。

　意識が戻り目を開けると目の前に木が見えた。
「ここが異世界」
　暫く周りの風景を見まわしていたが、このままじっとしているのもつまらないので身体を動かすことにした。この場合どうすればいいのかと考えていたら、昔嗜んでいたゲームやラノベだと冒険者ギルド的な所で登録して冒険者になるのがセオリーだということを思い出したのでそれらしいところに行くことにした。
　暫く歩くが見つからん。
　仕方なく誰かに道を訪ねようと思い偶然視界に入った女性に声をかけた。
　どうやら女性のようで黒いドレスローブを着ており、その服装な上からでもわかるたわわな果実が視界にはいる。さすが異世界ここの女性も日本じゃ体験できんな。
「すいません。少しお聞きしたいことが・・・」

「はい、なんでしょ・・・・!?　あ、アクシズ教徒の方ですか?ご、ごめんなさい、勧誘は間に合ってます」
「え?」
そう言ってたわわな女性はとんでもない速さで行ってしまった。
その後も道を尋ねようと道行く人に話しかけるも全員に逃げられてしまう。
仕方なくぶらぶらと歩いているといつの間にかそれらしい建物にたどり着けた。
「冒険者らしき人も出入りしている」
それを確認した俺は意を決して扉を開けた。中は冒険者と思わしき人々が多数、昼間から酒を飲んでいる人もいれば掲示板の前に立っている人もいる。
「あ、いらっしゃ・・・・・」
俺が中に入った瞬間俺の周りが静かになった
「あの、ごめんなさい、アクシズ教団の勧誘はお断りさせてもらっているんですが」
いきなり短髪赤毛のウェイトレスのお姉さんがそう言ってきた。
「今日は冒険者の登録をしたくて来たんですが」
「も、申し訳ございません。でしたらあちらのカウンターへどうぞ」
フム、イライラしてて少し声に力が入ってしまった。
「あ、ありがとう」
なぜ冒険者になるのにこんな思いをしなくてはならないのか。
「すいません」
俺は指定されたカウンターに行き、受付にいたこれまたたわわな果実を持った金髪のお姉さんに話しかけた。
「はい、今日はどう・・・・」
同じ反応・・・
「勧誘ではありません!　冒険者登録をしたくてやって来ました!」
らしくもなく思わず声を上げてしまった。
「そ、そうですか。えっと、では登録手数料が１０００エリス掛かりますが大丈夫ですか?」

は？
登録手数料？

「いきなり詰んだ」
俺は今ギルドの隅に座りこれからどうしようかと考えている。
てかっ転生させるときにこの世界のお金ぐらい用意してくださいよ女神様・・・
下を向きため息をついていると誰かが話しかけてきた。
「もし、アンタもしかしてアクシズ教徒かい？」
声をかけられ顔を上げ見ると神父が着るような服を着こんだ爺さんが居た。
「何か御用ですか？　アクシズ教団に入会希望ですか？」
「いやいや、私はエリス教徒なのでその勧誘はお断りさせて頂くよ」
「それは失礼しました」
「君は随分変わったアクシズ教徒だね」
「そうですか？」
「ああ、アクシズ教徒の人は騒がしく、変人が多いからね。あんたは今まで見てきたアクシズ教徒とは違う感じがするんだよ」
「それよりもご要件の方を伺いたいのですが？」
「先程のやりとりを見てたが、アンタ冒険者登録の手数料が無いんだろ？私がそれを払おう」
え？
「何故ですか？」
うまい話には裏がある。死んだじいちゃんの教えだ。
「お伽噺になるが、女神アクアと女神エリスは先輩、後輩の間柄らしい。これも何かの縁と思ってね」
・・・
「あ、ありがとうございます」

エリス教。
「いいんだよ。汝にエリス様の加護を」
そう言って爺さんは１０００エリスを置いて行ってしまった。
俺は再び受付に行き貰ったお金をお姉さんに渡した。さっきのやり取りを見られてたのか、お姉さんは目を合わせてくれない。
お姉さんから簡単な説明を受けた。冒険者とは何でも屋。ギルドの依頼を受けてモンスターの討伐や護衛などを行う。そして冒険者には、各職業があるらしい。
職業、ここで戦闘スタイルを選ぶのか。俺は女神様から貰ったチートを活かせる魔法職を一択だがね。暫くして受付のお姉さんが俺に免許証くらいのカードを差出してきた。
お姉さん曰くこのカードにレベルや各ステータス、経験値、モンスターの討伐数などが表示される。また経験値が溜まり、レベルが上がって新しいスキルを覚えるためのポイントのを確認、それを習得することにも使用するとか。
「あなた、ゲームは好きかしら?」
女神様の言葉を思い出す。成程確かにゲームみたいだ。
「ではまず、かちらの書類に身長、体重、年齢、身体的特徴の記入をお願いします」
身長１７５ｃｍ　体重６０キロ　年齢は１９、黒髪黒目　。
「はい、結構です。えっとではこちらのカードに触れて下さい。それであなたのステータスが分かります」
成程これでステータスを計って職業を選択するのか
「選んだ職業によって様々な専用スキルを習得出来るようになりますので、その辺りも踏まえて選択して下さいね」
まぁどんな結果になっても俺は魔法使い一択だかな！
俺は少しドキドキしながらカードに触れた。
「はい、ありがとうございます。カゲミヤミズホさん、ですね。ええと、筋力と運はそこそこで・・・　え!?　なんですかこの数値!?生命力や器用度、知力はそこそこ高い位ですが、魔力が尋常じゃないレベルなんですが、あなた何者なんですか?」

異世界転生した日本人です。
「そんなに凄いんですか？」
すっとぼけたようにお姉さんに聞いてみた。
「す、凄いなんてものじゃないですよ!?」
そこまで言いますか
「この魔力とあなたの知力ならすぐにでも即戦力になりますよ。聖騎士（職業全般のルビを失敗しています）《クルセイダー》。剣士《ソードマスター》。《アークプリースト》。《アークウィザード》など最初から全ての上級職になれます」
ここまで凄いとは思わなかった。お姉さんからカードを一旦受け取って《アークウィザード》か《アークプーリスト》か迷っていると気になる表記を見つけた。
「この《アデプトウィザード》って何ですか？」
そう言った瞬間、お姉さんは固まった。
「そ、そそそれは!? !! この国の歴史上二人しか確認されてない伝説の上級職です!!!」
お姉さんの声にギルド中の人もこっちを向いている。
まじっすか、チートすげっ。
「な、ならこの《アデプトウィザード》全能魔法使いでお願いします」
お姉さんは震える手でカードを操作する。
「アデプトウィザードはこの世の全ての魔法を操ることのできる伝説の上級職です。その実力はかの魔王にも引けを取らないと言われています。冒険者ギルドへようこそカゲミヤミズホ様。スタッフ一同、今後の活躍を期待しています！」
お姉さんはそう言ってにこやかな笑みを浮かべたていたが、周りの職員と冒険者はただ黙ってこっちを眺めている。
多少出鼻をくじかれた感はあるがこれから俺の異世界での冒険生活が始まったのであった。

この敬虔なアクシズ教徒に異世界生活を！

この世界に来て一週間が経過した。

「親方このレンガとコンクリートの材料費の決算書類にサインお願いします」

「おう、」

俺はこの始まりの街『アクセル』で土木工事・・・　もとい工事関係の団体や業者の書類整理や処理の仕事をしている。

本当はさっさと魔法おぼえて冒険者らしくモンスター狩り、レベルを上げて強敵と戦いながら異世界の美少女（ヒロイン）とキャッキャウフフする予定だったが、現実はそう簡単にうまくいかない。

「社会人になって現実を嫌っていうほど学んだのにまさか異世界でも同じ気持ちになるなんて」

異世界だろうが、どこであろうが生きていくためには金が必要だ。金ならギルドで依頼を請けて稼げばいい。普通はそうする。しかし俺はまだ魔法が使えない。だから討伐依頼など受けられるわけがない。この世界では魔法やスキルを身に付けるには誰かにそれを教えてもらわなければならないのだ。

俺自身特に人見知りなわけないじゃない。なら何故誰も俺に近づこうとしないのか。これでも上級職、しかも伝説の上級職だぞ。理由は一つ、俺がアクシズ教徒だということだ。

アクシズ教

女神アクア様を御神体とする。この国随一の・・・　随一の変人集団にして迷惑団体だ。

この世界に来て自分の入ったアクシズ教を調べたがそれはもう酷い。

無理矢理な勧誘、大人の信者が幼児に対して異常行動を起こす、エリア教への迷惑行為など、問題行動に関しては枚挙にいとまがない。またその自由な教義からか変人が多い。その変人のおかげで国教であるエリア教に次ぐ名声を持っているが・・・　はぁ・・・。

そんなアクシズ教徒の俺に近付く物好きはいない。なので生活費

を稼ぐためにギルドで仕事を紹介してもらってなんとか街の土木工事のアルバイトをすることになった。
「オーイ、カゲミヤこっちの材料の仕入れ状況なんだが少しみてくれねーか」
「はーい」
　最初のうちは俺も工事に参加してた。しかしある時休憩時間に工事関係の書類が落ちていたのでそれを事務所に届けた時につい市役所勤めだった頃を思い出してもっとこうすれば分かりやすく、効率が上がるとアドバイスをした。こっちの世界の書類の内容が非効率で酷かったのでちょっと意見を言っただけなのだ。それだけなのに・・・・
「まさか次の日に臨時の事務員になってくれと言われるとは。今やってる仕事は前世と一緒・・・一緒か」
　俺は事務作業するために異世界に来たんじゃない
　まぁ金払いはいいから我慢。
　その次の日も事務作業。
　その次の日も。
　次の日も。
　次の日も、次の日も、次の日も、次の日も・・・その次の日も、そノ次のひも、そのツぎのヒも・・・。

　ナンデオレイセカイキテジムサギョウシテンノ？

　その次の日俺は臨時の事務員を辞めた。
　親方を始め、他の仕事仲間が必死に辞めないでと叫んでいたが、そんな事は知るか。
　俺は、俺は・・・冒険するために、異世界の女の子たちとイチャイ

チャするために来たんじゃぁぁぁぁ!!!
「何でもいい、魔法を覚えてやる!!!」

それなら数日後。
俺は畑作業をしている。この世界の農作業は初級魔法を使うので、もう何でもいいから次いでに魔法教えてほしくてこの依頼を受けることにした。
ざっく、ざっくつるはしを持って土を耕す。
「よし、あとは『クリエイトアース』！」
耕した土に向かって右手を広げて呪文を叫ぶ。
これは初級魔法のクリエイトアース、土を生成魔法で、生成された土を畑に撒くと良い作物が育つらしい。
まぁ俺にかかれば初級魔法でも一味違うのだ！
「おらぁぁぁッ!!!」
「こ、これが初級魔法なのか？」
依頼人の農家の人が驚いている。
普通の冒険者やウィザード（魔法使い）ならば初級魔法は一定の範囲に土をかけるだけだ。しかしアデプトウィザードたる俺は違う。
「一気にいくぞ！」
俺は魔力で魔法の威力を上げて東京ドーム半分位の畑一帯にクリエイトアースをふりかけた。
「終わりました」
「す、すごい。普通なら三日かかる作業を数時間で終わらせるとは」
「これでも伝説の上級職なので」
「これなら報酬も少し上げなくてはならないね」
「ありがとうございます」
「礼を言うのはこっちだよ。最近の魔法使いは初級魔法なんてスキル

ポイントの無駄だと言って、覚えようとしない。それに畑仕事の依頼なんて出しても滅多に人なんか来やしないんだよ」
「まあ畑仕事は植えるのも収穫も大変ですから」
この世界の野菜は動くそして飛ぶ。それを知ったときは驚愕した。
「お金になるキャベツや白菜ならともかく、一般野菜は農家の人間の仕事だと思ってるですよ」
この世界のキャベツの収穫はそれはもうワイルドらしい。
「全く昔は冒険者も畑仕事をして共に汗を流したのに悲しいもんじゃ、」
異世界でも最近の若者は・・・ とかあるんだね。
「また何かあったら依頼してください」
「ありがとう、お前さんを直接指名してやるよ、はっはっは!!」
その後農家の人から野菜を分けてもらった。
「どうぞカゲミヤ様こちらが報酬です」
通常報酬と特別報酬をギルドのぱつきん巨乳お姉さんから受け取り、貰った野菜をギルドで野菜炒めにしてもらい食事を済ませた後寝床である馬小屋に帰った。
「これで最初の土木工事五千エリス三日分、臨時事務員一万五千エリス十日分、畑仕事三千エリス一日プラス臨時報酬一万エリス、今日までの生活費を引いて・・・ 十三万エリス」
「俺が使える魔法は初級魔法の」
ティンダー
水を生成するクリエイトウォーター
土を生成するクリエイトアース
風を生成するウインドブレス
氷を生成するフリーズ
火を生成するティンダー
上記の魔法は全てのスキルと魔法を習得出来るが本職よりも下方修正が付いてスキルポイントを少し多く必要な『冒険者』でもポイントを1消費するだけでとれるお得な魔法だ。
しかし俺が初級魔法を全て習得するために消費したポイントは2

5ポイント。初級魔法一つに5ポイントも必要だった。
「効率悪いな」
でも魔法の威力は自身の魔力によって威力と範囲をコントロールできるがとても難しい。
翌日、いつまでも日本時代の仕事用スーツで動きづらかったので、青色の冒険者服を買った。
「見た目は駆け出し冒険者だな、魔法いには見えん」
今回の討伐クエストはジャイアントトード。三日以内に五匹討伐すれば完了。
巨大カエルの討伐。こいつは繁殖期になると近隣の農家の家畜を襲うので度々討伐依頼が出ている。また初心者でも油断しなければ簡単には倒せる。所詮はカエルなのだ。カエルは金属が弱点と聞いたので一応少し長めの短剣を買った。
「さてどうするか」
目の前にはでっかいカエルがいる。
やつらは長い舌を伸ばして獲物を丸飲みする。補食中は動けなくなるらしいが俺は絶対に丸飲みは嫌だ。
舌を伸ばす攻撃を避けつつ二、三匹を一ヵ所に集める。よし狙い通りだ。
『クリエイトウォーター』ッ！からの『フリーズ』ッ！」
カエルに魔力を強めに込めたクリエイトウォーターを一気にかけて水浸しにした後フリーズで一気に凍らせ短剣でとどめをさす。だが結果は予想外な結果になった。
まず俺のクリエイトウォーターはポケ●ンのハイドロポンプ並の勢いでカエルに直撃、三匹の一緒に飛んでいった。その後遠くにいた他のカエルも巻き添えにして合計十匹のカエルを氷付けにした。
「短剣の出番なくカチカチに凍ってる」
これが超魔力、これがアデプトウィザードの力か。ほぼ全力の初級魔法でこの威力なら、中級、上級魔法だったらどうなるんだ・・・
「これは早くコントロールできるようにしないと大変なことになる」
予定を早めるか。

俺はギルドに向かって走った。

「凄いですね！お一人でジャイアントトードを十匹も討伐なさるなんて！」

「ありがとうございます」

「流石は伝説の上級職ですね、こちらは報酬です」

報酬は五万エリス。一匹五千エリスか。

俺は簡単に食事と風呂を済ませて馬小屋に戻り旅の支度をする。

「魔法といえば紅魔族、そしてアクシズ教徒の総本山アルカンレティア」

前者は魔法のコントロールを学ぶために、後者は一応アクシズ教徒なので洗礼を受けるため。まあこれは興味本位なところもあるけど。

さて俺の始めての異世界での冒険はどうなるのか。

この敬虔なアクシズ教徒に始めての冒険を！

アクセルの街を出て数時間。
俺は馬車に乗ってアルカンレティアに向かっている。最終的な目的地は紅魔族が住む紅魔の里だがその前にアルカンレティアで観光とアクシズ教の巡礼を行う予定だ。
またアルカンレティアから紅魔の里に行くには危険なモンスターが生息する地域を行くしかない。もうひとつ『テレポート』という空間移動魔法で行く方法もある。俺は後者の方法で行くつもりだ。レベル1の俺が危険な道を行くなど自殺行為だ。
だが問題もある。紅魔の里へのテレポート料は三十万エリス。今の手持ちでは足りないのでまた金を稼がないとならない。
「すいません、アルカンレティアまであとどのくらいですか？」
「お客さん、アクシズ教徒だから早く聖地に行きたいのは分かるが今日中に無理だね」
「そうですが」
日本だったら車や電車であっというまだったのを思い出して文明のありがたさを感じた。
「それよりもお客さんも冒険者ならこの馬車がモンスターから襲われないように見ててておくれよ」
馬を引いているおっさんはそう言って笑った。この馬車の他にも数台走っている。そして馬車を護衛する冒険者。街から街への移動には大人数で行動するようだ。
ボケッと空をみる。
「たまにはこんな日もいいな」
考えればこっちに来て働いてばかりだった。せっかく伝説の魔法上級職になったのに魔法を覚えるのにも時間がかかった。
俺は日が落ちるまで何処までも広がる青空を眺めていた。

夜、アクセルとアルカンレティアの中間辺りで休むことになり、おっさんが用意してくれたテントを張って夜営していると、突然護衛の冒険者が叫んだ。
「敵だぁぁぁ!!!」
「あれは!?アンデットナイト!?それも何だあの人数は!!!」
「嘘だろ!?ゾンビなら分かるが何で滅多にみないアンデットナイトが・・・!?」
「誰かプリースト呼んでこい！あと聖水もだ！一体づつ確実に倒すぞ!!」
うるさいな。お勤めをしっかりこなしているのは分かるがもっと静かにしてほしい。
俺は子供の頃から寝起きの機嫌が悪い。特に夜に起こされるとき、子供の頃は暴れていた。友人いわく今でも起こそうとすると殴りかかってくるらしい。
「何かあったんすか？」
あくびをしながら騒ぐ大柄な男性冒険者に質問する。
「あんたこの状況でよくあくびなんてしてられるな！」
初対面なのに失礼なやつ。
「まあいいや。俺寝るから静かに殺ってね」
「おいっまて！」
「ああっ!?」
なんだよ、こっちは眠いんだよ。
「お前も冒険者だろ！俺達と一緒に戦うぞ！」
「えぇ・・・俺レベル1のウィザードっすよ？」
それを聞いた冒険者は顔をしかめた。
「チッ何でレベル1のウィザードがアルカンレティアに行くんだよ！とっとと駆け出しの街に帰りやがれ！」
「アクシズ教徒としての義務を果たすためっすよ～」

「お前はあの頭のおかしい変人教団の教徒だったのか、もういい！お前は下がってろ！」
「はぁ～い」
　言われんでも下がるわ。
　俺は馬車の近くに敷いてある布団に転がった。遠くでは冒険者達の声が聞こえる。
「くそ～近づけるな!!」
「『ターンアンデット』ッ！」
「喰らえ！聖水投げ！」
　・・・　うるさくて寝られん。
　俺は起き上がって再び冒険者達の元に行く。
「うるさくて寝られんのだが」
　アンデットナイトだがなんだか知らねえが俺の睡眠を邪魔するとはいい度胸だ。
「くそっ！このままだと押されるぞ!!」
「もう駄目だお仕舞いだぁぁぁ！」
「くそ、アークプリーストさえいれば」
「無視すんなよ・・・」
　すると大柄な男性がやって来た。
「お前はレベル1の腰抜けウィザードじゃねえか・・・　どうだ、たっぷり寝られたか？」
　誰れだこいつ？馴れ馴れしいぞ？
「もしかしてあの骸骨騎士が敵なの？」
　見ると骸骨の身体に鎧を的って剣を持った存在が二十体近く近づいてきている。気のせいか俺の方に来てない？
「そうだよ！あれはアンデットナイトだ。この辺じゃあゾンビと一緒にたまに出てくるがこんなにうじゃうじゃ出てきたのは始めてだ！」
　アンデットかぁ～。確か物理攻撃はあまり効果がない。効果があるのは魔法。特に神聖属性魔法だよな～。俺覚えてないな～。
「プリーストはいたんじゃないの？」
「護衛のプリーストは魔力切れでもう動けん」

「あらら」
どうスッかね～。ふと冒険者カードをみるとスキル欄に『ターンアンデット』があった。
これ覚えればいいじゃん。
迷わずターンアンデットを習得。スキルポイント遂に一桁になっちゃった（笑）
「そんじゃあ、殺りますか」
俺は右手を掲げる。
「お前何を・・・！　おめぇそのマント光ってるぞ!?」
え？なんて？もう一度言って？
「『ターンアンデット』」
その後俺は再び眠りについた。

翌日。
昨日のことは余り覚えてない。気がついたらレベルが２になっており、スキルポイントが増えて４０に。あと『ターンアンデット』覚えてました。あと俺が昨日二十体近くのアンデットナイトを浄化したとか。
「いや～昨日はバカにして悪かったな」
「あなた誰ですか？」
「おいおいそれは酷いぜ。昨日お前さんの魔法を見たのは俺だぞ？」
何言ってるのこの人？
「おめぇウィザードじゃなくてプリーストだったんだな！」
「違いますよ」
「なら、アークプリーストか!?」
「だから違います」
しつこいやつだ。あと色々とうるさい。

「なら冒険者か？」
「カード見せてやるよ」
　俺はカードをしつこい大柄な男性冒険者に手渡した。
「アデプトウィザードだと!!?あの伝説の上級職じゃねーか!!!」
「色々苦労しているけどな」
「ならあの強さも納得いくぜ」
「勝手に納得するな」
「なああんたもし良かったら俺達のパーティーに来ないか？」
　勧誘イベント発生。
「えぇ・・・」
「こっちは王都でも活動しているそこそこやりてのパーティーだぞ！どうだ？」
　魅力的な提案だ。ここで入っておけば後々楽そうだ。だがしかし。
「ありがとうございます。でも今回の話は無かったことにして下さい。俺はまだ駆け出しです。自身の上級職の能力を使いこなせてないのです。俺が入っても逆にあなた方の迷惑になります」
「だが・・・」
「ごめんなさい」
「仕方ないか、冒険者は自由が一番だ。無理強いはせん」
　いい人で良かった。
「それと昨晩はすいませんでした」
「あん？どうした急に？」
「聞けば俺があなたに失礼な態度をとっていたと聞いたもので」
「ああ、その件ならもういいぜ。だが俺以外の先輩冒険者には止めとけよ」
「肝に銘じます」
　寝起きの時の性格何とかしないとこれから仲間を作るとき大変なことになりそうだ。
「お客さん方、まもなくアルカンレティアに着きますよ！」
「お、そろそろだとよ」
「遂にアクセル以外の街に」

新しい街少しドキドキしてます。

「じゃあな、カゲミヤ」
「道中ありがとうございました」
俺は護衛の冒険者に頭を下げてお礼を言った。
「馬車のおじさんもありがとうございました。えっと料金は・・・」
「いや、今回無事ここにたどり着けたのはお客さんのおかげらしいじゃないか。特別に無料にしてあげるよ」
「でも・・・」
「お客さんは紅魔の里に行くんだろ？ならお金が必要なんじゃないか？」
全くその通りでございます。
「ありがとうございます。お言葉に甘えます」
「いいんだよ。またひいきしてくれよ」
「はい、またお願いします」
おじさんとも手をふって別れた。
「さてどうしようか」
馬車が着いたのは石像と噴水のある広場だった。
噴水から涌き出る水はとても綺麗で透き通っておりまるで鏡みたいだった。
ボケッと噴水を見ていると突然声をかけられた。
「ようこそいらっしゃいましたアルカンレティアへ!!!」
「観光ですか？入信ですか？冒険ですか？洗礼ですか？」
「それとも就職ですか？それなら是非アクシズ教団へ!!!」
「今ならアクシズ教団を広めるだけでお金が貰えますよ!!!」
「いま入信すればまもなくアクシズ教徒と名乗れますよ？」
「「「「さぁどうですか？？？？？」」」」

初対面なのに騒がしい人達。これがこの街のアクシズ教徒か。
俺は自身のアクシズ教団のペンダントを見せる。
「俺はとっくに入信済みですよ。今回は洗礼と仕事を探しに・・・」
「おおっ!!なんと!同士でしたか!それも自らの足で聖地にたった一人で来るなんて!!!」
「素晴らしいですわ!それにそのマント!とても神々しいですわ!まるでアクア様のように清らかで美しい青色!!!」
「お仕事なら是非うちへ、さっきの内容に加えて今なら邪神エリス教団への嫌がらせもセットですよ!!!」
「さぁさぁ同士よ!!!私たちといっしょにアクア様の素晴らしい教えを広めるのです!!!」
「そうだね。頑張るよ」
早くどっか行ってくれ。
「では同士、洗礼も大切ですがまずはお風呂に入ってくればよろしくてよ!」
「そうだな!兄ちゃんも長旅で疲れただろ!ここはアクア様の加護を受けた神聖な土地だ!ちょっと温泉に入れば疲れなんてぶっ飛ぶ!!!」
「は、はい」
「さようなら同士!!!」
アクシズ教徒の同士達はまたどっかに行って・・・ なかった。
「ようこそ!アルカンレティアへ!!かんこ・・・」
来た人全員にやってるとは凄いな。
まぁいいっか。それよりも宿に向かうことにする。
疲れた・・・

宿に荷物を置いた後アルカンレティアを探検することにした。俺の知らない所を散策する、俺の数少ないアウトドア系趣味の一つだ。
「それにしても幻想的な風景だ」
街全体は青を基調としたバランスのいい景観。遠目から見える大きな滝は常に大量の水を落としており、それが源泉なのか大きな湯気

が発生している。
俺が風景に見とれていると背後から女性の叫び声が聞こえた。
「キャアアアア誰か助けて!!!」
声のする方向を見ると青色のプリースト服を来た金髪の女性がパンの入った紙袋を持って走っていた。
これはどういった状況で？
まずは落ち着こう。まずは女性を見る。フム、美人だ。少し性格に難がありそうだが。あと服装のせいで少し隠れているが走る度に揺れる二つの大きなお山。そしてたまに見える太ももがなんともいい味を出している。
「ちょっとそこのあなた!!」
はい？
「さっきから私の胸と太ももをエロイ視線で見ていたあなたですよ!!!」
やはり女性は視線に敏感。
「あなたアクシズ教徒よね!!?同士ならちょっと助けてよ～後でお姉さんがデートしてあげるからね？ね？」
そう言ってお姉さんはこっちに向かってくる。
魅力的な提案だな。前向きに検討しよう。
「今日という今日は絶対に許さんぞセシリー!!!」
お姉さんの名前はセシリーか。そう叫んでいるのは黒いプリースト服を来た女性だった。彼女はセシリーさんを追いかけながら叫んでいる。
「あっちもなかなか良いものをお持ちで」
「ちょっと！邪神エリス教徒のプリーストに興味示さないでよ!!」
おっと早速嫉妬ですか。可愛いとこありますね。
「両者この場は一旦冷静になって下さい」
俺は平和的な話し合いを提案する。
「モグモグ話し合いでふってモグモグそんなのおほとわりよ!!!」
食べながら話すなよ。
「あなたもアクシズ教徒ね！そんな話信じられないわ！」

これは困ったな。どんだけ信用されてないのだアクシズ教団。
そうこうしているうちにセシリーさんのエリス教徒の人は俺の目の前を駆け出す。
「もういいわよ！一人で何とかするわ！」
「待ちなさいよ！」
逃げる人に待てと言われて待った人は見たことない。
「私には女神アクア様の加護があるから絶対に捕まらないですよ!!」
セシリーさん、それはフラグというやつですよ。
その後セシリーさんは落ちてあったバナナの皮を踏んで盛大に転けた。
あ、パンツ見えた。

路地裏に入りそこに落ちていたバナナの皮を踏んで盛大にこけたセシリーさん。
エリス教のお姉さんに捕まり抵抗したが結局パンをとられたセシリーさんは「私のご飯返してよおおおおおおっ!!!」と言って泣いていた。
路地裏で泣く女性プリーストか。興奮するね。
「何ニヤニヤしているんですか？警察呼びますよ？」
先程まで、泣いていたセシリーさんは目を少し赤くして俺を見てそう言った。
「まあ落ち着いてくだい。何があったんですか？どうしてエリス教のプリーストに追いかけられていたのです？」
温厚なエリス教徒があそこまで怒るなんて何やらかしたんだこの人？
「ちょっと恵まれない人に配給するパンを貰っただけよ」

「それだけですか？ちょっと多めに・・・」
「本当は？大丈夫怒りませんよ？アクア様に誓います」
「今日配給する分を全部頂きました!!」
「よし、身ぐるみ這い出変態貴族にでも売るか。それともビデオか？題名は路地裏でホームレスのおっさんにピーされる金髪巨乳プリーストでいいか」
「ちょっと!!?なに言ってるんですか!?私にそんなことさせたら私のファン八千の人達が黙ってませんよ？」
「そうかなら連続八千回の快楽でもいいね」
「そ、それだけは・・・ それよりも怒らないっていったじゃない！」
「俺は怒ってないですよ。でもその行いは人として、そもそも神に使えるプリーストの行動ですか？」
「私はアクア様の自由の教えを信仰し、自分の欲望を清く正しく実践しているだけよ!!!」
　アクシズ教の教えには残念にも反していない。ならこっちも自由にさせえもらうか。
「言いたいことはそれだけか？ならこっちも同じく教えを守ってセシリーさんに俺の欲望に協力してもらいますよ」
「うっ」
「八千人の相手はみんなおっさんにするか」
　その瞬間セシリーさんの顔は服と同じく真っ青になった。
「ちょ!?ほんとにごめんなさい!!謝るからほんとに謝るから!!」
「俺に謝ってどうすんだよ？」
「うぅ、分かったわよ」
　そう言うとセシリーは立ち上がって歩き出した。
「あなたも来てよ、同士」
「分かりましたよ、同士」

「私だって恵まれない人なのに・・・」
「言いたいことはそれだけか？なら懺悔室で迷える子羊の話を聞きながら裏では中年のおっさんにピーされてアヘってる企画ものも・・・」
「止めて！本当に止めて！」
俺達はこの街のエリス教団の教会に来た。
「行くぞ！」
扉を開く。
「頼もー!!」
セシリーさんが大声でそう言って入った。
「またあなたなの！もう今日の分のパンは配り終わって無いわよ！」
「そんな・・・ 私のパンが・・・」
「恐怖快楽に負けた美人プリーストボソッ」
「今まで恵まれない方々に配給するパンを全部持っていってすいませんでした」
セシリーは震えながらエリス教徒の方々に土下座した。
「ちょっと!?!!顔上げなさいよ!!何なの行きなり来てごめんなさいとか！今度は何を企んでるのよ!?」
何処まで信用落ちてるだよ。
「初めまして。私はアクシズ教団の新人教徒のカゲミヤです。この度は・・・ いえ毎度の事ながらうちのプリーストがご迷惑をお掛けしてます。私は以前エリス教徒の方に助けていただきました。そのご恩を少しですがお返ししたく今回このような事をしているわけです」
「そ、そうなのね。あなたは変わり者のアクシズ教団の中でも比較的ましな人なのね」
「騙されないで！この人は私達と同じく敬虔なアクシズ教徒よ。だって欲望のままに私とあなたの・・・」

「おやおや大丈夫ですか？土下座の姿勢がきつかったですか？」
俺は床に座っているセシリーに近づき耳元まで口を向ける。
「言ったらおまえの純潔は今日で終わりだ」
「・・・」
「何ですか？セシリー？カゲミヤ殿があなたと私がなんですか？」
「な、なんでもありませんよ～」
「何で棒読みなの？まあいいわ。謝ってくれたなら許すわ。」
「ぺっ邪神教徒め」
「あぁ？」
エリス教のプリーストさんからとんでもない声が聞こえた。
「何でもないで～す」
「はぁ。まぁいいでしょう。パンが欲しいのならまた来てもいいですよ」
「本当に？本当にですか!!!」
「ただし、きちんとした量しか渡しませんよ！」
「あ、ありがとう。これで安心してトコロテンスライムを買いだめ出来るわ！」
「あんたそれやめなさいよ!!」
二人はまた言い争いを始めた。
まぁいいや。これで一件落着。

俺とセシリーはアクシズ教団の教会に向かっている。
「あなたのせいで散々な目に合ったわ。どうしてくれるのよ！」
「俺はエリス教徒のひとに作った借りを返しただけだ」
「邪神エリスを信仰する邪教徒に借りを作るなんてまだまだアクシズ教徒としては半人前ね」
「お前はその半人前に脅されてるんだよ」
「う、うるさーい。私のこの清らかな身体を悪魔のごときエロイ視線

で視姦しといて何よ！このむっつり変態!!」
「そのむっつり変態に脅されるとはあなたもまだまだですね」
「う～」
いい感じに悔しがる表情いい。
自分でも不思議だが何で今日俺こんなにアグレッシブなんだ？寝不足のせい？
俺たち二人はアクシズ教団の教会に着いた。全体が青色を基調としたデカい教会だ。
「では早速」
扉を開ける。
「頼もう！」
「ゼスタ様～セシリー帰りました」
中には誰もいない。
「誰もいないようなんですが？」
「多分ゼスタ様は遊びに・・・」
「何だって？」
「多分源泉の管理に行っているのですよ！」
「そうか。なら改めて明日また来るか」
「では私も失礼しますね～」
セシリーさんはそういった出ていった。
一人ポツンと残された俺は宿に戻った。

宿に着いたので温泉に入ることにした。
今は男湯に浸かっている。隣に混浴があったがトラブルが起こる予感がしたのでスルーした
「あー」
気持ちいい～生き返る～

こっちに来たときからずっと休めなかったからちょうどいい感じにつかれが溜まってるな。

フッフッフ
この私をこけにしたあいつ・・・ カゲミヤといったかしら、絶対に許さないわ。見てなさい。

「ついうたた寝してしまいそうだな」
のぼせちまう。
「そろそろでるか」
宿の浴衣に着替えて部屋に戻る。そして障子を開けるとそこには・・・
「お帰りなさ～い。料理にする？お風呂にする？それとも、わ　たし　☆？」
同じく浴衣を着て人様の用意された料理を食べながらお酒で頬を赤くしたセシリーさんがいた。

「ぶっ殺」
食べ物の恨みは怖いんだよ？

一通り話し合いをしたら大人しくなった。やっぱりこの人は想定外の事にテンパる。そこを隙間なく殴り込めば陥落するな。
「グスッうぅ、ごめんなさい、許してください」
「こんなことはこれっきりにしてください」
「はい、分かりました。それでは失礼します」
「待て」
「え？まだ何かあるんですか？」
「せっかく来たんだ、最後まで付き合え」
「え？でも？私はカゲミヤの料理を食べちゃって・・・ !? まさか私を食べる気!?」
身体を押さえて顔を赤くするセシリーさん。
「それもありだが今日はいい。簡単なつまみを頼んだ。」
セシリーさんは目を点にしている。
「今日は奢りだ。」
「・・・ はい！同士!!」
こいつの今日一番の笑顔を見た。不覚にもドキッとした。
それからセシリーさんとの会話は続いた。
「それでね私はね！小さい子を男の子、女の子問わずペロペロしたいの。とくにあの柔らかい頬っぺたなんてもう最高よ！あと九才から十三才までのあの間も最高ね！心はまだ子供なのに身体は大人に成長する。でも自身の急激な変化に戸惑うその姿！堪らないわ!!!」
そのセシリーの顔はとても妖艶でそれは美しかった。言ってることは犯罪だが。
「お前色々終わってるな」

「私の嗅覚とセンサーが反応しているわ！あなたも私と通じるところがある!!!」
「お前と一緒にすんな変態プリースト」
「その変態プリーストをエロイ視線で見てたのは誰だったかしら？」
「さあ？」
　セシリーさんはすっかり出来上がっており、浴衣も少しはだけてその健康的なお山と太ももが露になっている。
「これがみたいんしでしょ？ホレホレ！」
　するとセシリーは突然自分のお山を持って俺に近づいてきた。
　おお、谷間の一丁目がぁぁぁ!!!!これが巨乳の魔力かぁぁぁ～。おそろしい!!
「ほーれ」
　この野郎。
「さぁ正直になりなさい。アクア様を騙せても私のセンサーは騙せないわよ！」
　本能には逆らえない。
「うふふ、目線は正直ね。」
「神につかえるプリーストなのにその乳は何だよ。
　誘ってんのか？」
「これは私が毎日アクア様にお祈りして手にいれた戦利品よ！」
　戦利品なんだ。
「それよりもカゲミヤ、あなたのせいでパンの配給が決まった数しか貰えなくなったじゃないのよ！」
「お前に配給いらんだろ」
「いるわよ！私はね、ところてんスライムを買い占めたせいで毎回お金がなくて食事がそれしかないのよ!!」
「バカかお前は・・・ならところてんスライムを買わなきゃいいだろ」
「嫌よ、私ところてんスライム大好きなんだもの！」
「好物でも三日も食べ続けたら飽きるだろ」
「そ、それはそうだけど」
「それで、ところてんスライム買いすぎえ金欠エリス教のパンの配給

にちゃっかりすがってたのか」
「フッフッフッ。これはただパンを頂くだけではないのですよ！」
「ほうそれで？」
「これは聖戦なのです！邪神教徒のエリス教団に対する戦争なのです！私達の偉大な女神アクア様の教えを広める手段なのですよ!!!!!」
「・・・」
何を言っても無駄だな。
「もういいわ」
「うふふ、私の勝ちね！さあ謝って！私にあんなことさせたこと謝って!!」
「へいへい、めんご」
「ちょっと全然反省の気持ちがこもってないわよ！」
最後まで騒がしいな。
「俺はもう寝る」
「え？まだ日を跨いで無いわよ！夜はこれからでしょ!!」
「もう眠いんだよ。言っとくが夜更かしすればするほど俺は不機嫌になってナニするかわからないぞ？」
「負けたま逃げるのね？とんだ負け犬ね！」
「わんわん、僕は負け犬なので寝ます」
「ちょっと！」
セシリーさんを無視して俺は敷かれていた布団に転がって意識をてばなした。

次の日の朝
部屋には大量の酒瓶と料理が入っていただろうお皿があった。
セシリーさんは居ない。
枕元に書き置きがあった。
ご馳走さま☆
「・・・」
もう二度とアクシズ教徒と飲むときは先に寝ないことをこの日生涯まで誓った。

この敬虔なアクシズ教徒に洗礼とお仕事を！

セシリーさんに昨晩の件についての説明と仕返しのためアクシズ教団の教会に向かう。
「ついでに巡礼するか」
この街随一の教会の前に着く。建物だけは立派だ。俺は余り気が乗らないが教会の扉を開けことにした。そこにはプリースト服を来た美人の変態と同じくプリースト服を来た貫禄のあるおっさんがいた。隣には青スーツの秘書らしき人もいる。
「おおっ！あなたですか！この変態プリーストのセシリーを脅して彼女にとんでもないことをさせた新人教徒のカゲミヤ君というのは!!?」
「全部嘘です」
「全部本当のことですよ！私をエリス教団の教会で土下座したさせてあんなことまでしたのですから!!!」
「なんと恐ろしいことを！ですが心配いりません。我が教会でアクア様の聖なる洗礼を受ければあなたはもっとアクア様を信仰心が強くなるでしょう!!」
「この変態がいる教団にこの変人ありか」
セシリーさんが言うにはあのおっさんがアクシズ教団の最高責任者で最高司祭、そしてトップレベルのアークプリーストのゼスタ様らしい。思った通り変態野郎だ。それもセシリーよりも異常者か。この教団のトップは頭のネジをどこかに飛ばしているのか？
「セシリーさん後で話したいことがあるので二人っきりで会って下さい」
「あらお姉さんをデートに誘うならトコロテンスライムを一箱かエリス教の配給用のパンを一週間分持ってきなさい。それか現金でもいいわよ♪」
「・・・」
こいつは・・・
「それよりカゲミヤ殿は何しにここへ？」
「アクシズ教徒としての使命を全うするためにまずは洗礼を受けに来

ました。それとそこの変態のせいでお金が無くなったので仕事を紹介してください」
「素晴らしい心掛けです！近頃の若者はアクア様の聖なる洗礼を受けようとしないのですよ！あなたはいずれ大物になりますよ！間違いありません!!ビビっときました!!」
「そうですか？このむっつり変態男のどこにそんな素質あるんですか？」
「見なさい彼の着用しているケープを！あそこからアクア様の聖なる加護を感じます！あなたそれはどこで手にいれたのですか？」
「これは・・・」
　本人から貰ったなんて言えない。
「我が家に代々と伝わる聖なる物なんですよ。俺の家系は代々とアクア様を信仰していましたから」
　とっさについた嘘。通じるか？
「なんと素晴らしい!!!代々アクア様を崇められているとはさぞ素敵な家庭だったかと思います!!!」
　やはりアホか。
「それよりも早く洗礼をお願いします」
「おや、これは失礼しました。。セシリー準備を」
「了解～」

　俺は教会の裏にある大きな泉に案内された。
「ここで何をするんですか？」
「まずはここで身体を清めるのです！さぁさぁ早く服を脱いでさぁ早く!!!ハァハァ」
「・・・」
「ハァハァ・・・　早く!!!」

・・・

「早く、さぁ!!!」

「少し黙れ・・・」

「もう照れ屋さんですね。さっさと身も心もゼスト様に捧げなさい。ゼスタ様は最高司祭のアークプリーストでり、上位悪魔を単独で撃退できるほどの実力者です。しかも悪魔っ娘以外ならオークでもオーガでも何でも愛でることができる御方ですよ。もちろんそこに性別はありません!!!」

セシリーさんの言葉に絶句する。これがアクシズ教団最高責任者。ただ者じゃなかった。

「帰れ」

変態と変態プリーストを追い出し服を全て脱いで泉に浸かる。季節は春だが冷える。

どのくらい浸かればいいのだ?

「ちゃんと頭まで浸かるんですぞ!」

いつの間にか変態責任者が戻ってきていた。

「ゴボコボゴボ」

もって一分か。

そろそろ苦しくなったので頭を水面に上げようとした瞬間。突然頭を押された。

「ゴハッ!!!ゴボボボ!!」

突然なんだ!?いきなり頭を掴んで水中に押し付けるのは!立派な殺人だぞ!

「アクシズ教徒なら水中で呼吸をするのは朝飯前です!!!さぁ水中でアクア様の教えを叫ぶのです!」

無理に決まってる!

「お前ゴボボふざけんな!ゴボボボ!!」

俺を襲っているのはゼスタ様だった。この変態野郎。まさかサイコパス属性も持ってるのか。

「ほらほら頑張れ、カゲミヤ。あなたならいけるわよ~ほれほれ~」

セシリーさんもいたのか。つーか見てないで助けろ!今助けてく

れたら結婚してやるから!!!
「お前ボボボ見てないで助けゴボボボ」
あの変態責任者は縛って吊るしてやる。
「さぁもうすぐです!!アクア様の聖なるお姿がお見えになってきたでしょう!!!」
それイコール死だよね？
「いい加減にしろ!!!『クリエイトウォーター』ッ!!!」
「初級魔法ごときで私を止めるなど・・・ な!?何ですかこの威力は!!!うわあああああ!!!?」
俺の全力のクリエイトウォーターにゼスタ様は吹っ飛ぶ。
「ハァハァ、助かった」
「お疲れ様～それにしてもあなたの使った、あの魔法はなに？初級魔法よね？」
「俺は魔法使いの上級職『アデプトウィザード』だ」
俺の言葉にセシリーは驚いた。
「まさか伝説の上級職だったなんて!!!間違いなくこれはアクア様のお導きよ！これで生意気にと国教となっているエリス教にも一泡かかせられるわ！」
確かにアクア様の導きで俺は力を得た。でもこの力で人に迷惑をかけることは余りしたくない。
「何を企んでるか知らないが協力はしないからな」
「もう照れなくてもいいのよ！勿論きっちりお礼はするわ！」
「貧乏人が何を払えるんだ？」
その無駄にエロい身体を差し出す気か？
「お姉さんとデートよ!!!」
「もういいわ」
変態プリーストはほっといて服を着ようとしたが、この場にこいつがいる。
「服着るんでどっか行け」
「お構い無く。私は子供のお肌以外興味ありませんが、あなたのその引き締まった身体には少しそそられるとのがありますね」

「『クリエイトウォーター』ッ」
「え！ちょっと待って話し合いを、ぎゃあああっ!!」
邪魔者も消えたのでさっさと身体を拭き服を来た。

「よくぞ過酷な洗礼を耐え抜きましたね。これであなたは立派なアクシズ教徒です」
優しく微笑むゼスタ様。
「そうですか。それより仕事を紹介してください」
「そうよ！カゲミヤには私を養うという仕事があるのよ！だからゼスタ様、早く楽でお金が稼げる仕事を早く紹介してあげてください！」
「今のは幻聴か？いつから俺は変態プリーストを養うことになったんだ？」
「あら、私にあんなことさせといて責任とらないつもりなの？それに私は感じます。あなたと一緒にいれば食事には困らないと！それに顔はそこそこイケメンだし！」
「知るか」
「酷い！私とは遊びだったのね!!」
「遊びでもごめんだ」
そもそも金がないのはお前のせいなんだぞ。
するとゼスタ様が口を開いた。
「それなら私とベットで夜な夜な語り合うのはどうですか？わたし個人の支払いになりますが、目標の三十万エリスもすぐに貯まりますよ？」
何で俺が三十万エリス必要なの知ってるの？
「フッ、どうですか？」
「断る」
「はぁ残念です。では私の仕事の補佐をしてください。最近遊びすぎ・・・ アクア様の偉大な教えを広めるために私自らの布教活動に精を出しすぎて書類がたまってるもので」

また書類仕事か。
「・・・ 分かりました」
「私を養うためには頑張ってねアナタ☆」
「黙れ変態、食事の時間になったら来い。飯を用意してやる」
「うっひょおおおおおお!!!じゃあ私は布教活動いってきまーす!!」
まだ午前中だというのに疲れた。

アルカンレティアでの生活十日目
「カゲミヤ様こちらの書類にサインを！」
「カゲミヤ!!!またアクシズ教徒がうちのプリースト達に嫌がらせをしたぞ!!!」
「カゲミヤ～お腹すいたよ～早くご飯作ってよ～」
「カゲミヤ様～こっちの書類のチェックをお願いします」
「カゲミヤ様、源泉に異物が混入していたので浄化するためのプリースト派遣についてなのですが」
「カゲミヤ兄ちゃん～今日もお菓子作ってよ～」
「カゲミヤ様!!」
「カゲミヤ!!!」
「カゲミヤお腹すいた～愛しのセシリーお姉さんからのお願いよ～」
・・・
「アアアアアアアア!!!!!!!ふざけんな!!あの変態責任者どこ行きやがった!!!」

俺は現在アクシズ教団臨時最高責任者兼アクシズ教最高司祭代理をしている。
何故こうなった。あの変態がためていた書類を二日で処理したからか？それともアクア様の信仰心が高いからか？理由はどうでもいい。
早くここから出たい。
「はぁ、」
「カゲミヤ様、ため息などしていてはしあわせが逃げますよ？」
「トリスタンさん、そろそろ代理を止めさせてくれないか？」
「何をおっしゃいますか!!?カゲミヤ様!!!あなたのおかげでどれだけたまってた仕事が片付けられたか！それにあなたがいないとアクシズ教団は終です！」
そこまでいう？じゃあ終わっていいよ！とっとと終わってくれ頼むから！アクシズ教の教えは自由が売りなんだろ？なら俺を自由にさせてくれや。
「えぇ・・・」
「あなた～♪今日のご飯はなにかしら？」
このバカっぽい声は変態プリーストのセシリーか。
「お前は俺の妻かセシリー」
「もうお互い素直になっちゃいましょうよ！あなたも私の事を呼び捨てにしているし。やっと私を養う気になったのね!!!」
「お前を養ってたらこっちが破産するわ」
「照れちゃってもう可愛いわね」
「はいはいありがとね」
「さあ今日のごはん!!!」
「もう少しで今日の仕事も終わるから、もう少し待て」
「えぇ～ごはん！ごはん！私の晩ごはん!!!」
うるさい変態プリーストだ。こいつの精神年齢は大人に慣れきれ

なかったようだ。
「……終わった」
書き終わった書類を秘書のトリスタンさんに渡して確認をしてもって判子を押す。これで今日のノルマ達成。
「ではカゲミヤ様今日もお疲れ様でした。先に失礼しますね」
彼女はにこやかな表情で教会を後にした。俺は教会にあるキッチンで今日の飯を作る。
「エプロン姿のカゲミヤもいいわね～」
こいつは一度死んだ方がいいと思う。でもこの変態のために手を汚したくはないからギリギリで殺意を納める。
「もうそんなに見つめないで、照れちゃうじゃない」
「なに赤くなってんだ気持ち悪い」
「むっ！乙女に向かってそれはないんじゃない？」
「お前鏡って知ってる？一回見てこい。そこにはプリーストの皮を被った変態が写るはずだ」
「もう！私だって傷つくんですからね」
セシリーの顔は少し悲しそうだった。外から見たら綺麗な女性を泣かせたくそ野郎と思われるかもな。しかし頭のおかしい変態にも人間の心があったのか。
「そうか、悪かったな。なら次お前を傷つけたら何でも一ついうことを聞いてやる」
セシリーは笑顔で約束ですよと言った。その笑顔はついみとれてしまうくらい綺麗だった。

翌日最近街の温泉の一部から異臭がすると報告が多くあり俺は教団のプリースト数人を連れて浄化と原因を調べるため現場に向かった。
件の温泉につくとそこは真っ黒になった温泉があった。
「これは酷いな」

「カゲミヤ様このようになっている温泉はまだいくつもあります」
「プリーストの浄化作業も追い付かない状況か」
「はい。それに厄介な事にこの汚染はとても強い毒なのか分かりませんが浄化にとても時間が必要で、しかも浄化のために水に触れたらとんでもない激痛が襲うのです」
「俺達アクシズ教のプリーストも耐えきれないのか？」
「悔しいですがその通りです」
　それは厄介だな。
「とりあえず効率は落ちるがなるべくプリーストは何人かのグループで作業をやってくれ。浄化作業担当とその交代要因、そして浄化して者が少しでも楽になるように回復魔法の『ヒール』をかけ続けろ」
「分かりました」
　あまり必要ないとおもっていたが俺も浄化魔法と回復魔法を覚えるしかないか。それにしても犯人は誰だ？いくつか考えられるのはこの街に恨むを持つ者。この街に恨身を抱くのはアクシズ教を潰したい者と・・・　後は魔王軍ぐらいか？アクシズ教団は魔王の変な噂を好き放題に言ってるからいつか報復に来るかとしれないと思っていたからもしかしてと思ったが。
「なあ魔王軍で毒に詳しいやっかいな奴っているのか？」
　近くにいた男性プリーストに聞いてみる。
「私がこの世で最も恐ろしい毒を操るのはデッドリーポイズンスライムです。でもだいぶ前に討伐されたらしいですが」
　スライム、日本では某冒険ゲームのせいで雑魚モンスター扱いだがこの世界では結構強敵らしい。
「そうか、まぁいい浄化頑張ってくれ。俺も浄化魔法と回復魔法覚えて浄化作業に参加する」
「そんな！カゲミヤ様は最近多忙なゼスタ様に代わりアクシズ教団の運営をやっていると聞きました！そんなカゲミヤ様にこれ以上の負担はかけたくないですよ！」
　アクシズ教にもまだまともな奴がいたのか。
「ありがとうな」

「いえいえ、私にはこのお湯を利用される奥様方の為に働いているのですよ!!!ああっあの全てを受け入れ包むようにふっくらしてつい甘えたくなる熟した身体!!!もう堪りません!!!」
前言撤回。この熟女好きの変態野郎、俺の関心を返せ。
「何を言ってる！若いピチピチのお姉さんの方がいいに決まってるだろ！」
「お前ら何を言ってる！ちっちゃくてロリな方がいいであろう！私は十二才以上はババアだ!!!」
「てめっ!!表出ろこの犯罪者野郎が!!!」
「お前はアクア様の教えを否定するのか！この背教者が!!!」
「お前ら喧嘩してないで作業しろよ。そうしないと熟女もお姉さんもロリっ子も来ないぞ」
「よーしお前ら頑張るぞ～!!!」
「「おおおお!!!!」」
やはりアクシズ教徒は滅ぶべきかもしれん。それとも本当に俺がトップになって宗教改革でもするか。

それから三日経ってついに変態責任者を捕まえた俺は最高責任者兼アクシズ教最高司祭代理を辞めて目的地である紅魔の里に行くためテレポート屋にいる。
後ろにはカルト教団・・・ もといアクシズ教団の皆さんが見送りに来ている。

「カゲミヤ様～いつでもお待ちし通りまーす」
「絶対また来いよ！カゲミヤ様!!」
「おにいちゃーん!!バイバーイ!!!」
　アホで他所から見たらとんでもなく手がつけられず、問題ばかり起こすどうしようもない奴等だがやっぱり長居すると情ってものが沸き起こるのか、ほんの少しだけミジンコレベルではこの街に永住してもいいと・・・ 思う。
「カゲミヤ～!!!また来ますよね！また会えますよね！」
「なに泣いてんだお前らしくないぞ」
「グスッだってだって」
　見た目だけなら俺のストライクゾーンな金髪巨乳プリーストのセシリーは目に涙を浮かべていた。
「ほんとアホだな」
「カゲミヤも人のこと言えないんじゃないの？貴方も泣いてるじゃない!!」
　まさか俺が？
　頬に涙が伝わる。俺はこの変態と別れるのが嫌なのか。
「誠に遺憾である」
「そんなに寂しいならお姉さんが着いていってあげようかしら？」
「絶対にお断りだ」
「カゲミヤ殿色々あったが少しの間私の代わりに教団を運営してくれてありがとう、おかげで遊び・・・ おっと失礼、私も巡礼に専念できました」
　お前今遊びって言ったよね？
「そんなカゲミヤ殿に『ブレッシング』!!よい旅を！」
　変態から幸運を上げる支援魔法をかけてもらった。こいつは変態だがアークプリーストとしての実力はある。
「ありがとうございますゼスタ様」
「じゃあなセシリー」
「また会う日まで！私待ってますから!!」
　できればここには来たくないそう思った。

その後まだ何か騒ぐアホ達を無視して俺はテレポート屋によって紅魔の里に転送された。

敬虔なアクシズ教徒、紅魔の里へ！

「ここが紅魔族の住む紅魔の里」
温泉の街アルカンレティアからテレポートした、俺はアーチ型の石造り門にいた。
原理は分からないが物体を一瞬移動させる魔法であるテレポートに少し興味が湧く。冒険者カードのスキル欄には『テレポート』の項目があったが取得ポイントをみて諦める。
「とりあえず行くか」
俺は門をくぐり目の前にあったグリフォン像を少し眺めて紅魔の里へ。

まずは寝床を確保するべく宿を目指したが。
「すまないな、今空き部屋はないんだ」
なん、だと。
「そうですか、では他の宿を紹介してください」
「あ～この里で宿はここだけなんだ。悪いな兄ちゃん」
はい詰んだ。
「そうですか」
「代わりにこの里随一の喫茶店の割引券やるから元気出せって！」
「・・・ありがとうございます」
宿の受付のおじさんから喫茶店の割引券二枚をもらった俺は宿を出た。
考えても仕方ないので宿のことは一旦置いて観光することにした。泊まるところがなくて乗り気になれないけど。
俺は里の商業区と呼ばれる所を歩いている。この辺りは武器屋、魔法道具、ポーションを売っている店、喫茶店など里の外から来る人向けの施設が多い。ちらほらと紅魔族以外の人も見かける。
「土産屋まであるのか。異世界でもそういった店があるのか」

異世界の土産屋ということで珍しいものでも売ってるかと少し期待した店の商品を見る。
「なんだこりゃ？木刀にペナント？それに黒いローブ、これはコスプレ衣装か？」
思わず声を出さずにはいられない。そこにはどこか故郷を思い出させる品物が多かった。
「キーホルダーまである。そして極めつけは饅頭か」
なになに、『白の衣手で封印せし暗黒饅頭』だと？
「ネーミングセンスなんとしろよ」
俺が土産屋でそんな事を考えていると長い黒髪にその一部をうしろで団子にしてしばり、ロングスカート、大胆にお腹を出して上着は踊り子の衣装のような服の美女が店に来た。
その美女の顔とスタイルは凄い。あの残念美人のセシリーにも負けてない。
その人は少し店の商品を眺めると木刀を手にとってそれをレジに持って行き、その後どこかに行ってしまった。
紅魔族の女性は美形が多い。ここに来るまでに聞いた話を思い出した。そして実際に里に来て嘘じゃないと知った。
なんて素晴らしい所だ。ここに永住しようかとほんの少しだけ、そうミジンコレベルで考えた。
しかしいくら綺麗な人が多くてもこの中二病集団の里に住もうなどまともな人なら絶対にありえない。
「くだらないこと考えてないで次行くか」
俺は商業区を後にしてさっき宿のおじさんから聞いた猫耳神社なるものを目指す。

俺は猫耳神社に着いた。
そういえば、神社な来る途中に目立つ大きな家があった。その扉の前に学生らしき格好をした少女が一人で何かペラペラと呟いていたが、中二病が多い紅魔族の里なので何も不思議と思わなかった。俺も昔似たようなことを・・・ うん、忘れよう。
それはさておき神社を見ると概観は鳥居と屋根に境内には猫耳が着いたデカイ本殿らしき建物がある。
「ここが猫耳神社か。作りは日本の神社そっくりだ」
この感じから先に転生した日本人が伝えたのか？
さっそく鳥居をくぐり本殿に近づく。本殿の正面には賽銭箱、その上にはよく日本の神社でもよく見かける縄、確か七五三縄だったか。鐘は無かったがとりあえず硬貨を賽銭箱に投げて手を三回叩いて手を合わせる。
その後前を見ると、そこにはどこかのアニメイベントもしくは秋葉原のどっかのショップに置いてありそうなパネルが置いてあり、それには日本の旧スクを着て頭には猫耳を付けた女の子が描かれていた。
「・・・」
黙って猫耳神社を後にした。
次はどこに行こうかと考えていると周りをキョロキョロと見渡している怪しい男がいた。そいつは俺と目が合うとこっちに近づいてきた。
「おい、あんた!!この辺で紅魔族随一の美人らしき女性を見なかったか!?」
突然なんだ。礼儀を知らんのか。
「唐突に質問されても答える気にはならんぞ。それよりお前は誰だ？名前は？髪もボサボサで目には隈がある。まるで三徹したニートみたいだぞ？」
すると男はこちらを睨み付けてきた。
「そっちこそ失礼な奴だな。いいだろ我が名を聞いて震えるがいい!!!」
紅魔族風の名乗りか。さっきの宿でもおっさんから聞いたな。

「・・・ 我が名はぶっころりー!アークウィザードにして上級魔法を操るもの!!紅魔族随一の靴屋のせがれ、やがては靴屋を継ぎし者!!」
「よろしくニート君」
「俺はニートじゃねぇぇぇ!!!!!」

少しいざこざがあったがニート君ことぶっころりーの話は人探しだった。その人はこいつの片想い人で名前は『そけっと』。なんでも紅魔族随一の美人だとか。
「ぶっころりーお前の言う特徴をもった女性ならさっき商業区で見たぞ?長い黒髪にスタイルもその通りだった」
「なに!それは本当なのかカゲミヤ!!!よっしゃ!ちょっと行ってくる!!!」
ぶっころりーはそう言うと商業区の方に走っていった。気が早い奴だと呆れてしまう。たがどこかで止めなければいつかとんでもないことをしでかしそうだ。
「少し気になる。あいつのやってることってストーカーでは・・・」
心配になった俺はぶっころりーの後を追った。

商業区でぶっころりーを探そうと歩いていたが雑貨屋付近で怪しい人影を見つけた。
「なにしている不審者ニート」
「何て酷い呼び名だ!訂正しろ!」
ビンゴ。
「ごめんな、ニート」
「ニートもやめろ!!!」
「そんなことよりそけっとさんはいなかっただろ?」
「うぅ」
「お前の熱意は分かるが少しは冷静になれ。このままだと俺はお前を警察に連れていくことになる」

「人を犯罪者扱いは止めてもらおうか！」
「一人の女性を四六時中追いかけ回す行為は俺の生まれた国では立派な犯罪なんだ」
「うっ」
　ぶっころりーは地面に手を置いてうなだれた。ちょっと言い過ぎたかもと思って反省した、ミジンコレベルで。
「それよりそろそろ昼飯の時間なんだがこの里でうまい飯屋ってあるか？」
「なら紅魔の里随一の飯屋に案内してやる！」
　大袈裟な返事をするぶっころりー。ニートに道案内を任せても良いのかと思ったが、今この里で暇そうに・・・　里を案内してもらえるのは彼だけだ。
「期待しているぞ」
　ぶっころりーに案内されて着いた飯屋。その看板はとても長い名前だ。
　里随一の飯屋『紅魔飯、一口食べたらもう虜!!!　』
「大丈夫なのか？」
「ああ！ここの飯屋はめちゃくちゃ旨いんだ！」
　そう言うとぶっころりーは俺の手を掴んで店にはいる。
「らっしゃい！」
「いらしゃいませー」
「いらしゃいませ！」
　野太いおっさんの声と若い青年の声、そして可愛らしい少女の声が俺達を迎えた。
「なんだ、ぶっころりーじゃねえか？」
「引きこもりのお前が外食とは珍しいな、金はもってるのか？」
「この店はつけ禁止ですよ！」
　上からおっさん、青年、少女が順番にぶっころりーに話しかける。
「お前ら失礼だぞ!!」
　ぶっころりーは叫ぶ。今日お前叫んでばかりな気がする。下町にありそうな定食屋の服装をしたおっさんが話しかけてきた。

「そっちのにーちゃんは誰だ？見ない顔だな？」
「冒険者のカゲミヤです」
「そうかよろしくな。ならこっちも自己紹介しないとな・・・　いくぞ!!」
「おうっ！」
「はい！」
　紅魔族、自己紹介、まさか。
「我が名はびすとろ！紅魔族随一の料理人にしてこの里唯一の飯屋の主なり!!」
　角刈りの恰幅のいいおっさん。
「我が名はこっくん！紅魔族随一の料理人の息子にして今は料理人修行中！いずれは父を超えこの店を更に発展させる者!!」
　見た目だけならイケメンの爽やかな青年。
「我が名はぺこりん！紅魔族随一の料理人の娘にして兄と同じく料理人修行中！いずれは里の外で店を開く者!!」
　長い黒髪を二つの三つ編みにして頭にはバンダナを着けている少女だ。顔は田舎の農家に居そうな可愛系の少女。将来は美人になるな。
「・・・　よろしく」
　俺は少し馴れてきたのか、返事をした後にぶっころりーと共に席き着いた。まだ昼飯の時間には早かったのか客は少ない。
　俺はメニューをみたが案の定その名前は普通じゃない。俺はオススメはなにかと聞くとぺこりんが店主の厳選せし選ばれし供物定食（おまかせ定食）と言われたのでそれを頼んだ。ぶっころりーも同じものを注文。
「なあカゲミヤよ」
「なんだ？」
「お前寝る所あるのか？この季節は結構この里に外から人商人達が大勢来る。宿は事前に予約しとかないとまず泊まれないぞ？」
　もうすぐ冬が終わり春になる。春になると冬眠していたモンスターが活発になり、その為冒険者達の活動も多くなる。その冒険者達

に売るポーション等の魔法道具などをこの時期になると商人は買っていく、これが宿が埋まっている理由だ。紅魔族のポーションは質がよく強力なので高値で売れるらしい。
「なあこの里で夜寒くない場所ってある？」
　いくらもうすぐ春だからって夜はまだ寒い。馬小屋ではたまに寒すぎて凍え死にそうになった。
「ふっ、やはりか」
　こいつはむかつく笑みを浮かべた。
「殴りたくなるような表情は止めろ」
「ふっ、まぁいい。なら今困ってるだろう？」
「ああ」
「そこで提案なんだが、俺の家に来ないか？」
「は？」
「随分とまぬけな返事だな。」
「いきなり俺の家に来いと言われて驚かん方がおかしいわ。まさかお前男もいける奴？」
「違うわい!!!?」
　安心した。
「それで理由はなんだ？」
「ああ、俺って周りの大人からは家の手伝いもしない穀潰しだとか、せっかく上級魔法を使えるアークウィザードなんだからもっと里の為にもっと働けとか言われててちょっとうんざりしてたんだ」
「う、うん」
　言われているのは別に普通のことだと思いますが。
「俺もいつかは実家の靴屋を継ぐつもりでいる。だが今は自由でいたいんだ！靴屋のこともまだ自分のペースで仕事を覚えていきたい。」
「それでその話とさっきの事とどう関係している？」
「お前に親父の説得と俺の恋の手助けをしてほしい」
「???」
「お前は初対面の俺の質問にきちんと答えてくれた。まぁ外の人だからってのもあるが嬉しかったんだ。それに・・・ 俺を心配して来てく

れたんだろ？」
「お前色々チョロイぞ」
　ぶっころりーは真剣な眼差しだった。
「お前の言いたいことは分かった。俺がお前の家で厄介になる条件はお前の親父に今すぐ家業を継ぐのは無理だということを伝え、お前の自由な時間を増やすこと。そして片想いの相手との恋を実らせることだな。」
「そうだ！引き受けてくれるか？」
「暫くはこの里には世話になる。これからよろしくぶっころりー」
「ああ、」
　俺達は握手をした。
「お待たせしました！店主の厳選せし最上供物定食お二つです」
　俺達の前に元気な声でお盆を置いたぺこりん。
「メニューは鴨ネギの唐揚げ、鴨ネギのネギで作った和え物、汁、ご飯、デザートは店特性のアイスです!!」
「ありがとう」
「ではごゆっくりどうぞ！」
「「いただきます」」
　俺とぶっころりーは食べる。
　メチャうま

「ありがとうございました!!」
　俺達は飯屋で食事を終わらせるとぶっころりーの家に向かうことにした。
「お前最初から奢らせるつもりだったのか？」
「そ、そんなことない」
「こっち見て話せ」
　俺は自分だけでなくぶっころりーの食事代も払った。この野郎は無一文だった。まあ今回は案内料として払ったが今度は許さん。
「お前の家って集落にないんだな」

この里の住民は殆どが住居を集落として一ヶ所に固めている。
「理由は俺も知らない。しかしだ街から外れ孤独に生きる。なんかカッコよくないか？」
「知らんわ」
歩いているとさっき見た大きい家が見えた。
「ぶっころりーあれは誰の家だ？」
「あれは我ら紅魔族の族長の家だ。族長は凄腕のアークウィザードでこの里だけでなくこのベルゼルグ王国随一の魔法使いなんだぜ！」
王国随一の魔法使いか。今度訪ねてみようかな。しかし族長となれば前世で言う市長や町長みたいな人。里の人ならともかくよそ者の相手などしてくれはしいだろう。
「あと娘が一人いたな。俺の幼馴染と一緒に学校に通ってるそうだ」
この里には学校があるのか。本で調べたがこの王国に学校はない。中世の価値観が基本であるこの異世界は貴族は専属の家庭教師、一般市民は教会などで読み書きを覚えるか、親から最低限の文字が読めるように教えられる程度。そんな世界に立派な教育機関があったのは驚いた。
「その学校って誰が造ったんだ？この里以外では聞いたことないぞ？」
「それは俺も知らん。ずっと昔からある。何度か建て替えたからこの里が出来た当時からあったんじゃないか？」
「なら学校という制度を誰が伝えたか分かるか？」
物事を教える所ならさっきも考えた通り教会などが善意でやっている所がある。しかし制服を着て、決まった科目を勉強し、テストをする。昼には弁当を持っていって食べる。教師という職業、クラス分けをして年代事に分けて勉強。これらは日本人からすると普通だ。しかしこっちの世界を基準に考えるとあり得ない事だ。
やはりこの里には日本人が関係している。
「カゲミヤ大丈夫か？上の空だぞ」
ぶっころりーの声に少し驚いた。
「大丈夫だ」

「それより着いたぞ、ここが俺の家だ」
　そこには普通の一階建ての家があった。隣には小さく屋根がベニヤ板みたいな素材で出来ている家があった。
「あそこは俺の幼馴染の家だ。親父さんか変な魔道具を作ってるせいで貧しいらしい」
「そうか」
「ちょっとそこで待っててくれ親父に話してくるから」
　そう言ってぶっころりーは家に入る。
「どうしようか」
　なんとなく暫くぼけっとしていると視線を感じた。
　視線の方向をみるとそこには幼女がいた。
「じー」という擬音が見えそうな程こちらを見ている。
「何か用か？それとも俺の顔に何かついてるか？」
　すると幼女はこちらに走ってきた。容姿は真ん丸とした瞳に短い黒髪を二つ結びに星形の髪飾りをしている。
「おねがいします、なにかたべるものをください。もうみっかもなにもたべてないんです」
　うるうるとした瞳でそう言われた。
「可愛い女の子、しかもこんな年下ににこんなこと言われて揺らない大人はいないな。でも話は盛るもんじゃないぞ？どこで覚えた？」
　すると幼女はムッとした表情になった。
「姉ちゃん直伝の奥義が破られた。私も魔性の妹としてはまだまだということね」
「お前の姉さんはとんでもないアホか」
　こんな小さい子になんてことを教えている。
「でもお腹すいてることは本当だろ？」
「うん！」
「笑顔で言うな」
　可愛い奴だな。もしこれが成長した大人の女性だったら分かっていてもホイホイ確実にされただろう。
「この棒つきアメあげるよ」

「わーい、久しぶりの甘いもん!!」
幼女は俺の手渡したアメを手に取ると一心不乱になめはじめた。
「ありがとう！兄ちゃん!!!」
「どういたしまして」
その後幼女は目の前のぼろぼろのちいさな家に入っていった。
「あの幼女、将来大物になる気がする」
そんな事を考えているとぶっころりーが出てきた。
「待たせたなカゲミヤ、親父が待ってる」
「お邪魔します」
俺はぶっころりーの自宅に入った。

ぶっころりー宅に入った俺はぶっころりーの親父さんと話し合った。部外者の俺の話が通じるかは正直不安だったが、ぶっころりーが一人っ子だということを利用して、もし本当にこのニートが継がなかったら終わりだと、それらしい理由を言ったらなんとか説得出来た。だが週に何回かは靴作りの修行を行うことになった。
「カゲミヤよ、そこの馬鹿息子の我が儘に付き合わせてすまんかったな。良ければこの里にいる間はこの家で寝泊まりしてもらっても構わない」
「ありがとうございます」
「靴の材料調達を手伝ってもらうがいいかね？」
「わかりました」
「ぶっころりー、カゲミヤを使ってない部屋に案内しておいてくれ。俺は仕事に戻る」
「分かったよ親父」
親父さんはそう言うと居間から出る。
「とりあえずありがとなカゲミヤ。靴作りの修行はともかくこれでこそこそせずに堂々と歩ける」
「お前は脱獄犯か？」

その後ぶっころりーに部屋を案内してもらった後、その日の夜一緒に酒を飲みに行った。
「俺はそけっとが好きだーーーー!!!」
「きっちり歩けこの酔っぱらいニートが」
ぶっころりーは俺と居酒屋に行った後様々な種類の酒を飲みほした。結果はこの通り。
「らんだとカゲミヤ！俺はよはっらってなんてねぇぞ!!!」
「人に奢らせといてなに言ってやがるこの野郎」
俺はぶっころりーに肩を貸している状態だ。
「カゲミヤ!!!お前が歪んで見えるぞ！幻覚魔法でも使えるのか！」
「お前黙れ、その辺に捨てていくぞ」
「○▼※△☆▲※◎★!!!?!!!」
「人語を喋れ」
知能まで退化するとは哀れな奴だ。
「お前ら遅いぞ」
ぶっころりーの自宅前には親父さんがいた。
「すまん、せがれが迷惑をかけたな」
「全く勘弁しておほしいです」
「後でお前に伝えることがある、この酔っぱらいを部屋に運んでくるから居間にいてくれ」
親父さんはそう言って酔っぱらいアホニートを担いで行ってしまった。
「俺なんかした？」
疑問しか浮かばない。
俺は居間に行って親父さんが来るまでにじっとしていた。暫くすると親父さんが来てすぐに口を開いた。
「お前さんは魔法の知識と修行の為にこの里に来たんだろ？」
「はい、魔法がうまくコントロール出来なくて」
「お前明日から学校に行け」
「・・・ は？」
「話は族長と校長に通してある」

「この里の学校は魔法が使えない子が行く施設ではなかったですか？
それに俺はもう２０歳になるのに今さら年下にだらけの学校なんて」
　この年になって何で学校なんだ。大学ならまだ分かるが、この里の学校はどう見ても小中学校みたいな所だぞ。
「魔法の知識と技術を教えるとなるとやはりこの里だと学校が一番効率がいいんだ」
「えぇ・・・」
「他に手の空いてる凄腕の魔法使いとかいないですか？」
「いないな。そんな奴は里の外に出て冒険者をするか里でも立派に働いとる。うちのせがれも魔法使いとしての実力ではそこそこ高い。たがあの性格が・・・」
「あぁ」
　ぶっころりーはあれでまともなやつだったら今頃王都で凄腕冒険者になってるかもな。
　この里に来た目的は魔法をうまくコントロールすることを身に付けるため。ここは妥協するしかないのか？
「あまり乗り気になりませんがその話に乗させて頂きます」
「もう話はついてる。明日の朝八時頃までに学校に行って『ぷっちん』という名の教師に会うといい」
　相変わらず変な名前。
「分かりました」
「なら早速格好いい名乗りの練習だな」
「仰っている意味が分からないのですが」
「自己紹介するときは自分の中の名前を名乗るだろ？外の人達は我々の格好いい自己紹介を見ると何故かひいてしまう。全く変わってる」
　そっちが普通じゃないからでしょうに。
「それで何で俺が紅魔式の名乗りをしないといけないのですか？」
「ふっ、我々の里の学校に通うなら我々のルールに従って貰う」
「・・・」
　父さん、母さん、なんやかんやあって俺は人生四度目の学校生活を送ることになりました。

敬虔なアクシズ教徒と紅い瞳のウィザーズ

目が覚めた。昨日飲んだ影響が少し残っているのかまだ眠い。しかし今日、学校に通うため身体を布団から起こした。
「あー」
だるい。二度寝したい。
「でもそろそろ起きないと本気でヤバイ」
服を寝間着から前世のワイシャツとスーツズボンに着替える。その後ふらついた足取りで居間に向かうとおやっさんがテーブルの前に座ってコーヒーを飲んでいた。
「おはようございます、おやっさん」
「おはようカゲミヤ、せがれはまだ眠っているよ」
「昨晩少し飲みすぎたみたいですね」
「困った奴だ」
俺はおやっさんの小言を聞き流して用意されていた朝食を食べると用意してくれていた弁当をもらい受けぶっころりー宅を出た。
「また学校に通うことになるとは」
学校には八時に着けばいいと言われているので急ぐ必要も無い。ぶっころりー宅は学校との距離が近いので直ぐに着く。
「学校か・・・ 一年半ぶりだな」
少しドキドキしてきた。心情としては転校生みたいな気持ちだ。もし俺が女性キャラだったら寝坊して走って通学している男主人公とぶつかるお約束展開。もしくはその逆のパターンも。
「うわあああ!遅刻しちゃう!!」
こんな風に慌てて走ってくるヒロインもしくは主人公とぶつかってフラグが立つ的な展開があってだな。
「あああああ!どいてええええ!」
背後を振り向く暇もなくその声の主は俺の背中に突っ込んできた。

2

「あああああ！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！お怪我とかしていませんか？い、慰謝料は何百万エリス必要ですか？何年かかっても払いますので！」
「……」
俺の目の前にいるのは黒いローブを羽織り紅魔族特有の赤い瞳に綺麗な黒いセミロングの髪をリボンで束ねている、優等生といった感じの少女が、泣きながら必死になって謝っている。
「大丈夫です、それより慌てている様子でしたが大丈夫ですか？それにカバンの中身が散乱していますよ？」
「わ、私寝坊しちゃって、うう、もう遅刻確定だよ」
少女は泣き出した。俺は持っていたハンカチを少女に手渡し、本人は俺の行動に涙を浮かべながら固まってしまったが、顔を赤くしておどおどした様子でハンカチを手にとる。
「それで涙を拭いてくれ。とりあえず散らばった本を集めるぞ、泣くよりも行動することが重要だ。まだ急げば遅刻しないだろ」
「で。でもいきなり知らない人から物を貰うなんて心の準備が、その…」
「なんの準備が必要なんだ？」
「ひゃ、ひゃい」
びくびく震えていて小動物みたいでとても可愛いです。
「集め終わったぞ。それにまだ急げばギリギリ間に合うから」
「は、はい！えっと、そのあ、ああ、ありゃがとうございます!!!」
「めっちゃ噛んでる」
「うぅ」
トマトのように顔を真っ赤にした彼女はペコリと礼をすると走っていった。
「あの子大丈夫か？心配になってきた」
せめて彼女に良き出会いがあることを祈る。あとハンカチ返して。

3

学校に着きました。見た目は日本の田舎にありそうな木造校舎。

「昔の学校みたいだな」

校舎に入り、職員室に向かう。事前に聞いていたので迷わず来ることができ、職員室に向かう。

「すいません、今日からお世話になるカゲミヤですが」

ガララと扉を開くと机が数台あり、職員室という雰囲気だ。

「お前が例のカゲミヤか？」

入り口に近い席に座っていた、髭が少し濃いが、この人は教師だなと思える男の人が話しかけてきた。

「はい、カゲミヤです。職業はアデプトウィザードの・・・」

「族長と靴屋から話は聞いている。ようこそカゲミヤ、では自己紹介といくか」

自己紹介ですか。

「我が名はぷっちん！アークウィザードにして上級魔法を操る者！紅魔族随一の担任教師にしてやがて校長の椅子に座る者！」

勝手に座ってろ。この里はこの挨拶をしなければ死んでしまうのか。

「よろしくお願いします」

「あぁよろしく。さあ次はお前だぞ」

「・・・」

「どうした？まさか自己紹介も出来ない奴が我が紅魔の学校に通うのか？」

「後のお楽しみです」

「ほう、ならば楽しみにしているぞ、お前のクラスは俺の受け持ちだからな」

そう言ってぷっちんは不適に笑った。

「どうでもいいので早く案内お願いします」

「分かった。付いてくるがよい！」

ぷっちんの案内され俺は自身の学ぶクラスに着く。

「ここが今日からお前が通う教室だ。中にはお前の同級生となる魔法使いのひょっこり達がいる。歳は離れているが仲良くしてやってくれ」
　確か六歳離れている子供と勉強とは肩身が狭い。
「早く卒業出来るよう頑張りますよ」
「ふっ、期待しているぞ」
　ぷっちんを無視して教室の扉を開けた。
「失礼しま～す」
　ガラリと音をたてて教室に入る。その後再び出る。
「これはどういう事ですか？」
「なにか問題でもあるか？」
「俺の見間違えならいいんですが、女子生徒しかいなかった気がするのです」
「見間違えなどではない。私は女子生徒を受け持っている。私の教え子になるカゲミヤはここで彼女達と一緒に授業を受けて貰う」
「何故年下の子、それに女子生徒なんですか、普通は男子生徒だろ、ＪＫ」
「最後の言葉の意味は知らんが、今男子生徒の方は担任が男子だけで手一杯なんだ。紅魔族の男子はやんちゃだからな、はっはっは」
「・・・」
「諦めろカゲミヤ、それに年下とは言え周りは皆女の子だ、ハーレムだぞ？」
「それが１３歳の年下じゃなければ喜んでますよ」
「君は大人だろ？我が儘を言うのは許されないぞ？」
「大人であるまえに男なので無駄だと思っても一言申すことは大切だと思うのですよ先生」
「なら先生からのお願いだ、早く教室に入りたまえ」
　俺は教室に入った。先程の行動のせいか生徒達の見る目が少し痛く突き刺ささる。
「今日は新しい俺の教え子を紹介する。」
　ぷっちんが目でウィンクをしてきた。野郎のウィンクは潰したく

なるので後でぷっちん先生の目に指をぶちこむ事を決めた俺は一晩で考えた紅魔族の挨拶を行った。

「我が名はカゲミヤ!!!伝説の上級職アデプトウィザードにして!!!敬虔で誠実なアクシズ教徒、いづれは大魔法使いとなって魔王を滅ぼす者!!!!」

ケープをバサッとふりむかせ手で顔半分を覆ってから、ジョ○。立ちをしてそう宣言した。

「…」

恥ずかしい。

「かっ…」

か？

「「格好いい!!!!!!!!」」

5